

菅豊

Suga Yutaka

マイナー・サブシステム という営みに注目

自然と遊ぶための 仕掛け

近代の技術革新以降、人間の生活を維持するための生業は、質、量ともに大きく変貌している。しかし、そのような状況のなか、技術とそれを支える民俗知識を、前近代から現代へと継承している生業が、わずかながら伝えられている。それには、伝統性をブランドとして創り上げることによって、現代社会においてもエコノミカルに立派に成り立つた工芸や食文化など、いわゆる伝統産業と化した生業もあれば、一方で、経済の周縁部で目立たぬように細々と伝えられている生業もある。

私は、後者の地味な伝統的生業に関心をもっている。そのような活動は、今でも人間が直接自然と対峙し、自然そのものを資源として利用する活動である。それは、あるところでは山野の山菜やキノコ採りであったり、また、あるところでは海辺の貝採りであったり、その土地土地によって多様である。そして、換金されることはあっても、それで一年の糊口をしのぐことなどできないような小さな生業を

購入したほうが、断然安い。それでは、なぜ古風な、多く捕れない漁撈技術を、大川の人々は守り続けるのであろうか。これは、「楽しみ」という浮世とはかけ離れた言葉でしか、語り尽くせない。

大川鮭漁の「楽しみ」は、簡単にいって、鮭漁を通じたなかで作り上げられる人々とのつきあいや、かけひき・賭け・競争に勝った爽快感、それとカンとかコツといった個の身体に沈潜した技量の発揮といったものに見い出されている。その意味で、鮭はたくさん捕れなくとも、一尾一尾が、自分の手の延長線上にあるカギによって、個別の人間と直結している。これに生活がかかっていたら、そんなのんきなことはいつてられないであろうが、経済性の低下した現在となつては、むしろ陽気な「楽しみ」と化している。

しかし、この「楽しみ」としての局面を、生業の崩壊したものとみるべきではない。その「楽しみ」としての性格は、経済活動としての意味が削ぎ落とされる以前から保持していた、伝統漁業の本来の性格と考えるべきなのである。この「楽しみ」の要素は本来的に伝統的生業が具えていたものであつた。

このような伝統的な生業が、もし利益獲得を究極、唯一の目的として行われる経済活動であったのならば、その技術は生産性の高いものへと一方向的に転換され、自然への負荷は大きくなったであろう。しかし、伝統的生業には、ある則を越えない範囲で、その技術の発展や、自然へのアクセスの度合いを、あえてとどめているものが多い。

私は、伝統的生業には、経済としての意味の裏側に、昔から自然と遊ぶための仕掛けが組み込まれていたのではないかと、と考えている。そして、経済的な利益のみならず、活動そのものの目的こそが、生業を始めた継承したりする原動力として機能するのではないかと考えている。伝統的生業には、単純にカロリーやタンパク質獲得、あるいは貨幣の獲得が必要不可欠な要素としてあつたのではなく、その生産のプロセス自体も必要不可欠な要素として認識されてきたのではないかと。私は、そのような視点から、伝統的な生業をとらえなおしている。

生業と“遊び”から

12のアプローチ⑧

鮭漁を“楽しむ” 人たち

たとえば、新潟県岩船郡山北町。新潟県の最北で山形県と接するこの町に、大川という清流が日本海に注いでいる。この川には毎年秋になると鮭が遡上し、沿岸村落でになると鮭と呼ばれる小規模で個人的、自家消費的、低生産の古風な鮭漁が行われている。コド漁は、川中に設置した箱状の集魚装置(ゴド)のなかをのぞきながら鮭の到来をひたすら待ち、そこに入った鮭をカギでかき取るという、至つてのんびりとした漁法である。この漁は、古く十八世紀半ばには、既にこの地に登場していた伝統的生業であり、ほんの数十年前まで、沿岸住民の生業経済の一部分を確実に担っていた。

この漁法は生産性が低いために、ここ二十年間、新しい高生産漁法への転換が、水産行政を行う県などによって幾度ももくろまれてきた。しかし、このような漁法の変革—これは人と鮭との関係のとり結び方の変革といつてもよい—の圧力にもかかわらず、結局、地元住民の反対などにあい、今でもその古風な漁法は続けられている。



山吉志郎生業と筆者

実は、現在この漁法で行われる鮭漁は、エコノミカルな視点から素直にみると、かなり奇妙なものである。鮭漁自体で生計を立てているのではない。ほとんどが別に本業をもち、秋から冬にかけて特定の時期に鮭を捕るパートタイム・フイッシャーマンである。そして、捕れた鮭は換金されることはなく、ほとんどが自家用である。そのため、ときには一尾あたり数方円のコストがかかり、川で捕れた鮭としては、法外な負担を強いられることもある。ただ単に鮭を手に入れるのならば、むしろ、よその鮭

生業と“遊び”の 連続性

このように経済性や生産性のみに取次がない、生活の周縁的な領域に成立する生業を、われわれはマイナー・サブシステム(minor sub-system)と表現している。マイナー・サブシステムは、人類学者・松井健氏によって最初に提唱された概念で、「消滅したところで、その集団にとつても、当の生計を共にする単位世帯にとつても、たいした経済的影響をおよぼさないにもかかわらず、当事者たちの意外なほどの情熱によって継承されてきたもの(松井健「マイナー・サブシステムの世界」、篠原徹編『民俗の技術』、朝倉書店、一九九八)と位置づけられる。

このマイナー・サブシステムという概念を導入することにより、生業や仕事、労働のもつ経済性、生産性という宿命的な性質以外の社会的、文化的意義がより鮮明になる。そして、生業や仕事、労働と対概念である「遊び」とを連続的にとらえることができる。



新潟県岩船郡山北町大川のコド漁。
コドと呼ばれる集魚装置の中を
のぞき込みながら、鮭をかき取る



新潟県古志郡山古志村の闘牛。
山古志村の闘牛は、
決定的に勝負をつけない。
勝負の流れがある程度決まったところで、
人々が牛に縄を掛け、引き離しにかかる。
これが、牛同士の間いとともに、
山古志闘牛の見どころとなっている

従来、生業は生産活動としての観点から、「遊び」は非生産活動としての観点から対立的に描かれることが多かった。しかし、マイナー・サブシステムをみることによって、生業を行う経済性以外の要因をとらえやすくなる。また反対に、「見」遊び」として片づけられそうなる活動にも、その遊興性以外のかつてあった要因を見いだすことができる。

たとえば、新潟県古志郡山古志村。中山間地の山麓に集落が点在するこの村では、今でも闘牛が行われている。これは二頭の雄牛を闘わせる「遊び」である。それは観光資源としても位置づけられ、村の観光開発公社から幾ばくかの奨励金が支払われるが、牛の購入

費、飼育費を勘案すると、闘牛を行う人に金銭的な利益を上げようとする意図があるとは考えられない。今みると、明らかに自己目的的な非生産活動の「遊び」として、闘牛は純粋に消費されている。

しかし、もともと牛という動物を飼うことは、生産活動の一環としてあった。古くより移入された南部牛は、農耕牛として使役され、かつ、堆肥を生産するものとして重視された。また、肉牛としても売買されていた。そういう時代には、その生産活動の合間を縫って、闘牛が楽しまれていたのである。牛飼育は、決して娯楽本位のものではなく、生計を支える意味をもっていたのである。ところが、昭和四十年代に入って、金肥が主力

となり、耕転機が導入され、他の現金収入が増えると、経済としての牛飼育は衰退した。

また、牛飼育が経済的に無視できなかつたころ、その飼育には楽しみが内在していた。肉牛としてよい牛を育てて、他人より高値で売れたときの喜びはもちろんであるが、また、年に数回行われた闘牛で素晴らしい闘いをするときの喜びは他に代えがたいものであった。自分自身を投影した力強い闘牛の生産と、商品としての肉牛の生産は、本来相反することなのであるが、そこは適度に折り合いをつけてお互いに支障のない範囲で牛は飼われていた。

山古志村の闘牛では、今でも人牛一体となった闘いが展開される。

その闘いに内在する人と牛がつかつたエキサイトな局面は、かつての経済活動の合間に行われていた闘牛にも見受けられたものと考えてよい。決して、生業と遊びが切り離されていたわけではないのである。また、今、特に意図して「遊び」として形作られたものでもない。

現代社会において、レジャー(余暇)と称される労働の合間の「遊び」は、実社会における生活の規

自然を消費する現代

現代社会において、レジャー(余暇)と称される労働の合間の「遊び」は、実社会における生活の規

制や束縛、労苦から解放された、自由で主体的な消費活動として営まれていく。自然とかわる現代的な「遊び」を例にしても、そのあり方は、人間による自然の消費といつても過言ではない。アウトドアという洗練された言葉が、どれほどの自然を壊してきたか。また、動物園を愛するといふ人々が、どれほどの希少動物を絶滅の危機に追いやってきたか。私は、このような人間と自然との関係の歪みは、自然との「遊び」方が、現実の人間が生きてきた生業の世界と対立し、隔離されたところで形

成されたことに起因するのではないか、と考えている。

もちろん、自然とかわる生業すべてが、自然に対してア・ブリーオリに保全的であつたわけではない。貨幣経済が浸透して、よりよい生活への欲求に駆り立てられたとき、それは自然に対して容易に破壊的になりうる。しかし、現在残存している伝承的生業は、既に貨幣経済や消費文化の洗礼を受け、人々によって担われている。その点で、彼らと自然とのあいだに結びつた関係性は、持続的である可能性がある。

花鳥魚虫市場

私は、中国の都市に行くと、必ず花鳥魚虫市場を探し、訪ね歩いている。花鳥魚虫市場は、その名の通り盆栽、切り花から金魚、鑑賞鳥、コオロギなどの昆虫類まで所狭しと並べた、いわゆるペットショップ街である。最近、われわれ日本人にとってもなじみの深い犬猫なども売られているが、基本的に中国の伝統的な愛玩動物園中心の市場である。下手な動物園より珍奇な動物たちに出会えるこの市場で、自然を徹底的に消し去った都会の人々が、動物たちを買い求めていく姿には、自然からどうしても切り離されることのできない、人間の性を感じられる。夏場、下町では、籠に入れたキリギリスを軒先につるしてその鳴き声を愛で、秋になると、路地裏で子供から老人までコオロギ相撲に興じる。春になると、小鳥を籠ごと公園に持ち込み、鳴き声を競い合う。彼らの動物とのつきあい方に、恐怖と慣れをときおり感じつつも、花鳥魚虫市場は、ついついのぞきたくなる奇妙な空間である。

新環境学がわかる。

編集人●関戸衛
編集長●加賀勝雄
編集デスク●保屋野初子
編集スタッフ●鈴木美保子、塚田理江子
校閲●吉田宗弘
アートディレクター●岡本一宣
デザイン●中沢陸夫、佐藤秀考、田中明子
表紙、本文・絵●谷口広樹
1999年2月10日発行
発行所／朝日新聞社
郵便番号104-8011

東京都中央区築地5-3-2
電話番号03-5540-7846 (編集)
印刷・製本／凸版印刷株式会社
©ASAHI SHIMBUN 1999
Printed in Japan

次回は
「重話学がわかる。」を
98年2月下旬に
発売の予定です。

Back Number

バックナンバー リスト

購読申し込みは書店、ASA (朝日新聞販売所) へもしくはハガキかファクスで直読小社へどうぞ。
〒104-8011
東京都中央区築地5-3-2
朝日新聞社出版部直販担当
(ファクス) 03-5540-7845

AERA Mook
元禄時代がわかる。
現代へのスタート

AERA Mook
幕末学がわかる。
変革期を駆けぬけた人間群像

AERA Mook
家族学がわかる。
何か変わり、何か問題か

AERA Mook
「源氏物語」がわかる。
1000年を生きた、一大文藝ロマン

AERA Mook
「平家物語」がわかる。
名場面連続、人間ドラマの宝庫

AERA Mook
「万葉集」がわかる。
光が織り成す壮大なオペラ

AERA Mook
「旧約聖書」がわかる。
永遠のベストセラーを解析する

AERA Mook
「新約聖書」がわかる。
イエスを愛した人々の物語

AERA Mook
「漱石」がわかる。
いま、漱石がセクシュアル

AERA Mook
情報学がわかる。
創造力を表現するツール

AERA Mook
精神分析学がわかる。
心の地図をどう描くか

AERA Mook
生活科学がわかる。
現代生活の羅針盤

AERA Mook
民俗学がわかる。
「歴史」と「現在」をつなぐ道

AERA Mook
生命科学がわかる。
生命からのメッセージを読む

AERA Mook
新経済学がわかる。
日本経済再起への処方箋

AERA Mook
ファッション学がわかる。
魅力執筆陣の「華麗な哲学」

AERA Mook
気象学がわかる。
予報士への道すじをつける

AERA Mook
スポーツ学がわかる。
からだの仕組みと動きを科学する

AERA Mook
社会福祉学がわかる。
「みんなにやさしい社会」づくり

AERA Mook
コミック学がわかる。
日本生まれの世界育ち

AERA Mook
頭脳学がわかる。
すべてのものは脳に通ずる

AERA Mook
日本語学がわかる。
日本語のエキスを堪能する

AERA Mook
アジア学がわかる。
無限の可能性をひめた玉手箱

AERA Mook
社会学がわかる。
大いなる揺らぎに挑む

AERA Mook
教育学がわかる。
諸学の寄り集まり

AERA Mook
外国語学がわかる。
40言語のトビラを開く

AERA Mook
精神医学がわかる。
心の病と闘う人のテキスト

AERA Mook
法律学がわかる。
制定、改正のポイント

AERA Mook
政治学がわかる。
「この国に行くえ」を占う

AERA Mook
動物学がわかる。
まるごとエンターテインメント

AERA Mook
経営学がわかる。
ビジネスを志す人の道しるべ

AERA Mook
農学がわかる。
未来の命あずけます

AERA Mook
考古学がわかる。
エキサイティングな発掘

AERA Mook
建築学がわかる。
究極のコモンセンス

AERA Mook
経済学がわかる。
現実が正しさを証明する魅力

AERA Mook
マスコミ学がわかる。
メディアの達人が語る現場

AERA Mook
心理学がわかる。
こころの時代を研究する

AERA Mook
環境学がわかる。
21世紀の人類知を先取り

AERA Mook
国際関係学がわかる。
新しい世界を見る・考える

AERA Mook
哲学がわかる。
混沌の時代に道標を探る

AERA Mook
マルチメディア学がわかる。
感性の革命が始まった

AERA Mook
人類学がわかる。
ヒトはどこへ行くのか

AERA Mook
芸術学がわかる。
新しい美へのアプローチ

AERA Mook
歴史学がわかる。
人間の真実をつかもう

AERA Mook
宗教学がわかる。
「生と死」を説きとく